

特別体験期間中 **読売新聞オンラインとは？****購読申し込み [1週間無料]**

ニュース > 国内

読売新聞

オンライン

ログイン・登録

[震災8年]「災害科」1期生 巣立つ 「誰かを守る存在に」

4 時間前 **[読者会員限定]**

無断転載禁止

東日本大震災の後、被災地には復興の担い手を育成する学校や防災を学ぶ学科が新設された。震災経験の伝承や、災害に強い街づくりに向け、勉学に励む若者たち。宮城県多賀城市の県立多賀城高校では今春、災害科学科の1期生33人が卒業し、新たな舞台に飛び立った。

多賀城の千葉さん



多賀城高に災害科学科ができたのは2016年4月。津波のため市域の約3割が浸水、188人が犠牲になった被災地にあり、仙台近郊のため選ばれた。高校での防災系学科の設置は、阪神大震災を経験した神戸市にある兵庫県立舞子高に次いで全国で2例目だ。

多賀城市出身で1期生の千葉陽太さん（18）は、4月から大阪府の関西大学社会安全学部安全マネジメント学科へ進学する。多賀城高に進学したのは小学4年の時の震災経験からだ。学校から家族と一緒に高台にある自宅に戻って難を逃れたが、自宅の2階の窓から目にした黒い津波や浮かぶ車、屋根に上って避難する人を前に何もできなかった。父貞幸さん（58）は、流された車に閉じこめられた人の救出を続けており、「自分も誰かを守るような存在になりたい」と思ったという。

災害科学科のカリキュラムは4分の3が普通科と同じだが、災害史などの専門分野を履修。津波のメカニズムや仮設住宅でのコミュニティ支援のあり方なども学び、生徒会活動では市内142か所に津波の到達点を示す標識を設置した。

被災者の声を聞く機会も多かった。多賀城市の人は日頃、建物に囲まれて海が見えず、沿岸部に住んでいる意識が薄かったため、避難が遅れたと話した。「津波からの避難を意識したまちづくりを考えることが重要だ」と思った。

舞子高校の生徒たちとの交流では、「地震が起きたらまず火を消し、火災を起こさないのが大切」と言われた。津波ばかりを意識していた自分に気が付いた。

千葉さんは「阪神大震災の被災地で新たな知識を増やし、将来は災害に強い古里のまちづくりをしたい」と決意する。

購読申し込み

まずは一週間無料
お試しキャンペーン
実施中！

無料で応募!5月20日まで



- よみうりランド ワンデーパス (50組100人に)
- 読売日本交響楽団 選べる演奏会ギフトチケット (50組100人に)
- 東京宝塚劇場 最前列席 ヘアご招待 宙組公演 (5組10人に)
- 宝塚大劇場 最前列席 ヘアご招待 星組公演 (5組10人に)
- シャープ45V型AQUOS 4Kチューナー内蔵液晶テレビ (100台)
- アイロボット ロボット掃除機 ルンバe5 (100台)
- カシオ 電子辞書EX-word 2019年モデル (100台)
- Google Home (100台)
- よみほ4000ポイント (1000人)
- Wチャンス! はずれても500よみほ。全賞品はこちら

読売IDのご登録でもっと便利に

一般会員登録はこちら (無料)

国内 最新記事

生徒に「障害者いらない」発言、学校側争う姿勢
19:21